

## 新課程移行期の 課題と実践

### — 大阪府立吹田東高校の事例から —

10月号に引き続き、新課程移行期ならではの共通の課題とその解決策を考える。  
今号では、幅広い学力層の生徒が入学しながらも各生徒の学力を上げ、  
生徒の希望進路を実現させている大阪府立吹田東高校の事例を基に、  
SIを軸とした指導の流れを検証する。

課程移行期のポイント	大阪府立吹田東高校の実践
<b>SIの見直し・再確認</b> *2011年2月号特集など	<ul style="list-style-type: none"> <li>「入学してきた生徒の力を伸ばす」というSIを確認し目線を合わせる</li> </ul>
<b>生徒の実態を精緻に把握</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>中学校の指導状況を知る</li> <li>高校入学時の生徒の状況把握を行う（高校入試分析など）</li> <li>面談などをこまめに行い、短いスパンで生徒の変化を把握する</li> </ul> *2011年6、9月号特集など	<ul style="list-style-type: none"> <li>入学生へのアンケート調査により生徒の実態を把握</li> <li>進路マップなどを活用し、学年の強み弱みといった観点から生徒を把握</li> <li>入学生へのアンケート、進路マップの結果を基に生徒と面談</li> </ul>
<b>カリキュラム・指導計画の見直し</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>現行課程の総括</li> <li>柔軟性のあるカリキュラムを策定</li> <li>枠組み（カリキュラム）だけでなく、中身（授業）を充実させる方法を検討</li> </ul> *2010年2月号特集など	<ul style="list-style-type: none"> <li>「進路指導研修会」を開き、教師全員で生徒を見取り、学年団で方針を固める</li> <li>成績中位層を中心とした授業を展開。上位層には実力養成講習を開講。下位層には定期考査前に指名補習を行い学力の底上げを図る</li> </ul>
<b>授業・指導の見直し</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>「量から質」への転換</li> <li>SIと生徒把握を基に授業をつくる</li> <li>削られる内容、増える内容を意識して授業をつくる</li> </ul> *2010年6月号特集など	<ul style="list-style-type: none"> <li>若手教師への研修会「GUTS」で授業力を養成</li> <li>少人数授業のクラス編成の工夫</li> <li>授業評価アンケートによる授業の見直し</li> </ul>

**課程の移行期に  
学校の力を付けるポイント**

課程の移行期に、生徒の気質の変化を感じる教師は多い。更に、今回の新課程では学力層の拡大が懸念されている。こうした時期だからこそ、SI（学校目標）に立

実践に対する評価（効果検証）

ち返り、取り組みを見直す視点が  
必要だ。  
次ページからは、SIを再確認  
した上で、この10年で生徒把握を  
緻密に行い、学力層に合わせた指  
導を充実させながら、生徒の希望  
進路の実現を果たしてきた大阪府  
立吹田東高校の事例を紹介する。

\*は関連する月号

大阪府立吹田東高校

# 入学時から 緻密な生徒把握で 全ての学力層を引き上げる

## S-Iを見直して 抜本的な改革に着手

大阪府立吹田東高校はこの10年間で大きな変貌を遂げた。改革前は関関同立（\*1）の合格者は5人程度、産近甲龍（\*2）の合格者は25人程度であったが、2011年度の合格者は産近甲龍が延べ85人、関関同立が延べ41人と大きく伸びた。

同校はかつて、生徒の容儀に乱れが見られ、遅刻も恒常的に多い学校だった。「自主自律」の下、生徒が希望した進路を教師がそのまま受け入れる傾向も強かったと

いう。石田孝男先生は「入学した生徒の能力を3年間で伸ばすことが出来ていませんでした。学校全体が『ぬるま湯状態』にあったと思います」と振り返る。

00年度に着任した校長が学校経営方針を大転換したのが、改革の始まりだった。「自主自律」のS-Iを見直し、「入学してきた生徒全員の力を卒業までに引き上げよう」という取り組みが始まった。金藤剛通先生は当時を次のように振り返る。

「本校は府内の中堅校であり、勉強が好きな生徒ばかりではありません。そうした生徒たちの学力

を上げるには、基本的な生活習慣の確立が欠かせないと考え、まず遅刻をなくして始業時間を厳守すること、頭髮や服装、あいさつなどの徹底的な生活指導を行いました。それらの指導は生徒の授業態度を良くする効果だけでなく、授業がしやすくなったことで、教師が授業準備を入念に行うようになるという効果も生みました」

しかし、改革がすんなりと成果に結び付いたわけではなかった。生活指導・学習指導に厳しいというイメージが裏目に出て、5年程前には一度、定員割れをした。しかし、教師たちは悩みながらも、「手を掛けて生徒の力を伸ばす」ことが自校のS-Iであると再確認し、改革の手を緩めることはしなかった。

## 綿密な生徒把握で 変化に応じた対策を打つ

生徒を伸ばすには、まず目の前の生徒を正確に見取り、その成長を継続的に把握する必要がある。そこで、4月には新入生全員を対



大阪府立吹田東高校教頭  
今井洋子  
Imai Yoko  
教職歴27年。同校に赴任して1年目。



大阪府立吹田東高校  
小野茂喜  
Ono Shigeaki  
教職歴28年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。



大阪府立吹田東高校  
石田孝男  
Ishida Takao  
教職歴41年。同校に赴任して10年目。



大阪府立吹田東高校  
金藤剛通  
Kanatani Takemichi  
教職歴35年。同校に赴任して11年目。

### 大阪府立吹田東高校

◎大阪府北部の千里丘陵に1974（昭和49）年開校。シラバスや授業評価、学校協議会制度などを府内でもいち早く導入してきた。  
◎全日制／普通科／共学／1学年約360人  
◎2011年度の合格実績（現浪計）◎国公立大は信州大などに2人が合格。私立大は関西大、関西学院大、同志社大、立命館大、京都産業大、近畿大、甲南大、龍谷大に延べ126人が合格。

象にアンケートを実施し、「本校は第1志望か」「通っていた塾はどこか」などを尋ねている（P.40図）。小野茂喜先生はその理由を次のように話す。

\*1 関西大、関西学院大、同志社大、立命館大の呼称

\*2 京都産業大、近畿大、甲南大、龍谷大の呼称

「本校が第1志望かどうかは重要な情報です。第1志望であれば生徒も保護者も意欲は高いですが、そうでなければ学校生活に対して前向きになれる可能性がありません。そうした生徒には一層の気配りが必要です」

担任はこのアンケートを見ながら、入学直後に生徒全員と面談を行う。第1志望の生徒には入学しただけで満足してしまわないように、そうではない生徒には学校での目標や居場所を早く見つけられるように声を掛ける。6月には三者面談、11月には二者面談を行い、生徒の状況を把握する。

更に、進路マップなどを活用したデータに基づく生徒把握も実施した。過去6年分のデータ結果を基に分析し、5、11月の年2回、教師全員が参加する「進路指導研修会」で報告して、全校で共有している。

「学年と個々の生徒の強み・弱みを洗い出せば、担任は自信を持って指導できます。面談でも『A大に行きたいなら数学を頑張って3教科でBゾーン（\*3）以上を

目指そう』と、データに基づいて具体的に助言しています」（金藤先生）

### 授業評価を通して 中位層を伸ばす授業を実現

同校が最も力を入れるのは、生徒の大半を占める成績中位層の指導だ。

「本校は生徒の学力も志望進路の幅も広いため、カリキュラムも授業も中位層を伸ばすという観点で編成しています」（金藤先生）

更に、中位層の生徒は自分に自信を持ちにくく、高い志望を抱きにくい。先輩の例などを引き合いに出しながら、「自分たちも難関大に行ける」という雰囲気を高めていく指導が大切なのだ。

また、生徒が授業をどのように受け止めているかを把握するため、授業評価を年2回実施する。

「中位層の生徒にはどうしても目が行きづらいものです。そのため、授業評価は有効だと感じています。私は教師になって40年以上経ちますが、授業評価で生徒から

#### 図 2011年度 生活進路実態調査(1年生用)の質問項目

- 問1. 吹田東高校が第1希望でしたか。 はい・いいえ  
「はい」と答えた人は、第1希望の高校名を教えてください。( ) 高校
- 問2. 本校を希望した理由を教えてください。( )
- 問3. 吹田東高校はどのような学校だとまわりの人から聞いていましたか。( )
- 問4. 高校入試に備え、塾に行っていましたか。 はい・いいえ  
「はい」と答えた人は、塾の名前を教えてください。( ) 塾 ( ) 校
- 問5. 本校のオープンキャンパス見学会、学校説明会で来校しましたか。  
はい・いいえ  
「はい」と答えた人は、来校した時期にマルをしてください。  
8月・11月・2月・3月  
「はい」と答えた人は、その時にどのような印象を持ちましたか。( )
- 問6. あなたの得意科目と苦手科目は何ですか。  
得意 ( ) 苦手 ( )
- 問7. あなたの学力は総合して中学校でどのレベルだったと思いますか。  
あてはまるものにマルをしてください。上位・中の上・中・中の下
- 問8. 高校卒業後の進路希望はありますか。  
四年制大学・短期大学・専門学校・就職・未定 その他 ( )  
進路先を具体的に考えている人は書いてください。  
(例)\*\*大学、\*\*専門学校、\*\*会社 ( )
- 問9. 高校生活に何を期待しますか。( )
- 問10. 高校に入学して何か不安はありますか。 ある・ない  
「ある」と答えた人は、具体的に書いてください。( )

\*学校資料を基に編集部で作成

改善してほしいと指摘されたことの中には、自分が今まで考えつかなかったこともあり、改めて、生徒の目線に立つ重要性に気付かされました」（石田先生）

授業評価の結果は教科会で共有し、学年としての方針や課題について再度、目標設定を行う。組織として授業改善に取り組んでいるのだ。

成績上位層と下位層に対しては、授業外での支援を充実させ

た。上位層には、放課後や土曜日に自由参加の実力養成講習を開講。下位層には、生徒を指名し、定期考査前の2週間分の土曜日を使って補習を行う。

「以前は補習に指名されることを嫌がる生徒もいましたが、今はほとんどいません。指名されなかったのに出席したいと申し出る生徒がいるほど、学習に対して意欲的な姿勢が見られるようになりました」（小野先生）

\*3 「学習到達ゾーン」で、中堅私立大の合格可能性が出てくるレベルのこと

上位層、下位層の補習の他に、1・2年生には毎週火曜1時間目に小テストを実施し、合格点に到達しなかった生徒を放課後に残して、指導している。

「小テストを週明けの火曜日の1時間目に設定したのは、週末の家庭学習を教師がコントロールする狙いもあります。小さな取り組みの積み重ねが生徒の学力を保証するのだと信じています」（小野先生）

### 若手教師を育て 授業力を向上する

かつて教師として同校に勤務し、11年度に7年ぶりに再赴任した今井洋子教頭は、職員室の変化に驚いたと話す。

「職員室の雰囲気明るくなっていると感じました。以前は教科ごとに準備室があり、そこに個々の机があったため、学年団で集まることもままならない状態でした」

教師全員が集まる職員室を設けたことが一つの転換点となった。小野先生は「本校に赴任した

時、休み時間や空き時間に教師が集まって、生徒の個人名を挙げて話をしていることに驚きました」と語る。就業時間以外でも教師たちが集まって胸襟を開いて話す機会が増えたそうだ。

こうした学校の雰囲気があるからこそ、学年で効果があった取り組みを学校全体に広げやすい。例えば、2年生の中だるみ防止のために外部講師を招き進路講演会を開くなどの取り組みをしたところ、例年と比べ学力の推移に変化が見られた。指導の軸は守りつつも、学年独自の工夫を重ね、成果の検証を行った上で次の学年に引き継いでいく。こうしたPDCAサイクルを組織的に回していることが同校の強みになっている。

一方、3年前から「GUTS（ガッツ）」という若手教師塾を開き、教師の指導力向上にも力を入れる。現在の塾長は小野先生で、メンバーは新任の23歳から30代前半まで、非常勤講師を含めた10人だ。授業力向上の取り組みとして、小野先生の授業を参観した後、小野先生がメンバーの授業を

見てアドバイスをする。その他に、毎回の研修会では進路指導や学級経営などのテーマを設定し、二つの班に分かれて討議、話し合った内容を発表する。同校で過去にあった課題をケーススタディーとして取り上げることもある。新課程の全面实施や団塊世代の大量退職を控え、授業力を中心とした若手教師の指導力の育成が急務であると感じているという。

### 新課程移行後は入学生を 更に注意深く把握する

変化する生徒の実態を常に把握し、それに応じて柔軟に対応していく姿勢は、新課程移行期ではこれまで以上に重要となる。中学校段階の学習内容が増えたために、高校入学段階での生徒の学力差がますます広がるのが懸念されるからだ。

金藤先生は「気を緩めると、元の状態に戻ってしまうのではないかと。少しでも努力を怠ると、また定員割れをするのではないかと話した危機感があります」と話

す。そこで、新課程移行期には更に入学者の学力変化を綿密に把握し、細かに対応したいという。例えば、現在は1年生の英語と数学で1クラスを2分割した少人数の授業を実践しているが、年度途中での学力に応じた入れ替え制を導入するなど、生徒の実態に応じた運用を検討する予定だ。

「変化に対応しなければいけない新課程移行期だからこそ、これまで本校が大切にしてきた生徒の丁寧な把握を軸にした指導が重要になると思います」（小野先生）

「現状を維持するだけでは後退だと思っています。今までの努力が更に実を結ぶよう、新課程を契機に学校の改善を図っていきたいと考えています」（今井教頭）

同校の入学生の学力層はほとんど変わっていないにもかかわらず、大学合格実績は堅調に推移している。これは、入学生の学力を3年間で伸ばしている証しといえるだろう。今後も生徒がどのように変化していくのか、注意深く把握し、常に対応を改善しながら、生徒を伸ばしていく考えだ。